

誠さんの夢と情熱

おおくま ゆきこ
大熊 由紀子

国際医療福祉大学大学院教授（前 朝日新聞社論説委員）

まこっちゃんさま

「さん」で呼び合う懇親会でのあたたかな雰囲気、ポスターセッションの熱気、石川 誠という方の人生の成果を垣間見させていただいた思い出でした。

この「思い出」を書くためにメールを見返していて見つけた、5年前の私からのメールです。初めての出会いは、30年前の高知空港。

「先輩、荷物をお持ちします！」が第一声でした。同じ高校で私が7歳上なのだそうで、上下関係を重んじる体育系らしい言葉遣いに驚きました。前年の1990年に書いた『「寝たきり老人」のいる国いない国』の話を病院で話してほしい。そのとき『「いない国」のファーストネームで呼び合う、上下のない文化についても、話してほしい』という注文でした。

誠さん自身の表現を借りると、当時の高知の病院はこんなふうだったそうです。

「リハにまったく無関心な医師と看護師。チームアプローチとは名ばかり。PT・OTは各訓練室に閉じ籠もり、極めて不仲。STは高見の見物。ソーシャルワーカーは諦めの心境。在宅ケアサービスの実践は皆無」。それから25年たって、「さん」で呼び合う文化とリハビリテーションをおもう熱気が、輝生会グループにごく自然に溶け込んでいるのに、感激したのです。

確か、2000年頃のこと。誠さんから、突然電話がありました。「お嬢さんをください」。

といっても、もちろん結婚の申込みではなく、いよいよ、初台にリハビリテーション病院を立ち上げるので、リハビリテーション専門医の資格をもつ娘、るりに白羽の矢を立てたようでした。

今では信じられないことですが、当時の誠さんの医学界での評判はさんざんなものでした。「あんなヤクザみたいな男のところに行ったら、君の医師としての信用はおしまいだ」と真剣に忠告してくれる先輩がたくさんおられたそうです。娘は嚙下りリハビリテーションの師、藤島一郎先生のもとで修行していたとき、誠さんたちと食事をしたことがあり、その夢に心惹かれていたとのこと。先輩方の忠告を振り切って初台リハビリテーション病院の立ち上げにかかわることになりました。

誠さんの夢と情熱が厚労省の担当者の心を動かし、この分野で採算が成り立つようになったことはよく知られていますので、あまり目立たない食事への心配りについて。初台リハ病院では各階ごとに、ごはんを炊くのだそうです。その香りが患者さんの心を目覚めさせるように。

ご自身のお考え方からか、その死は、一般紙には報じられませんでした。

私が、志ある方々に送っている通称、えにしメールを読んでびっくりした方たちから次々と電話がかかってきました。「ええ男やったのに」「オトコの中のオトコだったのに」。なぜか、豪傑肌の女性からが多かったのです。